

INDEX

- 1 帰去来 るう@大喜多秀起
- 2 投稿 モルモン教との10年間 JESTER
- 3 連載 リアホナを斬る (第10回) 木塚灯八
2006年10月号 特別号 イエス・キリストの教会によこそ
- 4 連載 北龍専用 カルトと恐怖
- 5 訃報 ジェラルド・タナー氏
- 6 おしらせ

帰去来 るう@大喜多秀起

「もうそろそろ自分にもどりはったらどうですか」
私の友人が言う。見ると手にはハイキングガイド本とマップを持っている。「山の計画を立てましょう」といことのようにだが、どうやらそれだけでもなさそう。遠まわしに「あんた自分らしくないで」と言っているようだ。もちろん、今まであくせく働いて来たと言う意識もないし、そんな才覚など持ち合わせてもいない。
ふと、「自分らしさとは」と思う。
長年繰り返していると、最初は経験として蓄積されて来たものもやがて経験ではなくなっていってしまう。自分だけでなく他人にも不幸だ。使命感が消えたわけでもない。しかし、他からしか発見できない金属疲労があったことも事実だった。
昔、「『人生五十年』で田舎暮らしをはじめます」と上司に嘯いたこともあった。今も屋久島移住のメールマガジンの配信が停止できない。自分はいつも後回しの美学を教わった人も昨今自適でお過ごしとて夏にはビールが届く。
「助けて欲しいのはこっちもいっしょやで」
笑って、友人が京都は北山のハイキングマップを広げる。
プランを立てれば、また歩き出す。
八丁平湿原はもう紅葉だ。

投稿 モルモン教との10年間 JESTER

< 宣教師との出会い >

危険な宗教団体、それらは昔から存在し、今も存在します。
そういったものの存在は今から10年前、地下鉄サリン事件という形で我々日本人に強く印象付けられ、またこういった団体に対してどう対処していくべきであるのかを我々に問いかけた、そんな事件であったと思います。
僕自身もこの事件には強く関心を持ち、さらにその前から存在する怪しげな宗教団体、またそれらの事象に対して立場を明確にしない既存の宗教団体に対して、その存在意義を疑問視するようになってました。簡単に言うと、「宗教に存在価値なし」ということでした。
そんな思いを改めて強くしたサリン事件からすぐ後、30年ぶりという大寒波に見舞われた北海道にて、僕はモルモン宣教師の訪問を受けました。
彼らの訪問を受け入れた理由、それはいくつかありますが、まず彼らに関する知識が僕にはなく、また世間にも流布していなかったことがあげられます。そして、彼らが僕と年代も近く、また外国の人と話したのも初めてとても興味をそそられました。しかし、何よりも僕の心を動かしたのは「人生の目的」という言葉でした。当時、僕は失業しており、人生の方向性を見出せずにいました。何をしたら良いのか、自分の考えに自信が持てずにいた僕にとって、彼ら宣教師は「僕の何かを変えてくれるかもしれない」と思わせるに十分な存在でした。その時点で既に宗教への偏見は消え、僕は彼らと話すことを欲するようになっていきました。
モルモン的には、マインドコントロールの第一段階完了、というところでしょうか。
よく、カルトにハマるのは、その人の人格に問題がある、などという方がいますが、僕自身は宗教自体に嫌悪感を抱いていた人間です。当然、「何故、そんなものを欲する人間がいるのか？」とさえ思っていました。僕は、それでもニーズが合ってしまうば、きっかけなど簡単に出来る、という例であると思います。

< 改宗まで >

その後、宣教師とのレッスンが始まりました。高校時代、倫理の授業を受けていた自分にとっては少々驚くことが多かったのですが、彼らがキリスト教の宣教師と思っていたので、「傍から聞くのと、実情とは違うのだなあ。」としか思いませんでした。そして、スポーツ大会があるので来ませんか？、と誘いをかけ、スポーツが好きな僕としては断る理由もなく喜んで行きました。そこで、数多くの会員と知り合い、また新参者の自分をすんなり受け入れてくれ

こうして、僕は彼らとも交流を深めていきました。マインドコントロールの第二段階完了です。そして、この時の経験がなければ僕はモルモンに改宗することはなかったとも思います。何故なら、レッスンの内容や宣教師の言動に対して、疑問もまた多かったからです。にも関わらず、レッスンの内容を受け入れたのは、この時感じた心地よさが大きく関係しています。

すでに、倫理的に正しいかどうか、そういう秤は機能しなくなっていました。そして、僕の中で最も疑問があった什分の一のレッスンは独身成人の食事会の後に行われ、なんと会員が20人近く参加する中で、僕一人を生徒として行われたのです。しかし、僕は「そこまで期待されているのか！」と感激さえしました。もう普通じゃなくなっているなあ、と改めて振り返って思います。そして、僕はバプテスマを受け、モルモンに加入することになります。

<改宗ワードでの教会員生活>

加入してから、すぐに僕は宣教師の伝道を手伝うようになり、その中でさらに多くの友人を見出すようになりました。

すでに、モルモン教会無しでの生活など考えられなくなっていました。いつか彼らと憂いの無い世界へ、と考えるだけで幸福感に浸れる毎日でした。恐らく、モルモンに限らずその他のカルト経験者にも共感できる話ではないかと思えます。もう完全にマインドコントロールが出来上がっていました。

そして、モルモンに加入して3ヶ月たったある日、僕は独身成人代表という責任を与えられました。ずーっと心地よさを享受してきた自分に、モルモンが猛威を振るう、その始まりでした。

加入したばかりで、右も左も分からないため、僕はこういったことをしたら良いのか、色々な人に聞いて回りました。みんな一様に「君の自由にやっていいんだ。」と述べてきたのですが、そもそも主旨からして分からない僕にとっては困惑するだけでした。

後から分かってきたことですが、その責任はそのワードでは引き受け手がなかなか見つからない鬼門のような責任だったらしく、何も知らない僕に単に押し付けただけのようでした。

いくら頑張っても声を掛けても協力者は現れず、むしろその役割や存在意義さえ否定されることもありました。僕は次第に心をすさませていくようになりまして。「僕が何をやったというのか！」と憤ることもしばしば。そして、決まってそういう時は「人間は完全ではありませんから。」と言われ、僕に原因があるような言い方さえされました。

「右も左も分からない自分に押し付けておいてそれはないだろう！」と僕は完全に人間不信に陥りました。

それでも、何故かこの責任を果たさなければ、という気持ちは消えませんでした。ここで、その役割の存在意義、またそれを他の人々が必要としているのかどうか、そういったことまで議論できれば良かったのですが、僕は「神から与えられた試練である」という気持ちが消えず、また、「神は僕に必ず方法を与えてくださる。」と思い込んでいたため、もはや逃げ場がありませんでした。

それにしても、改宗前のスポーツ大会の時はあれほどフレンドリーだった人々が、僕が悩むようになった頃から、潮が引くように離れていったことは今考えても凄いなあとと思います。素晴らしい愛の持ち主たちです。そんな人々が証会の壇上では涙を流しながら語るのですから、心底呆れます。

その後、僕は仕事の都合で、現在も在住する関東へと引っ越すことになりました。

<決定的な不活発化>

新しい生活が始まりました。関東には同年代の人々も多く、僕は新たな希望を抱きつつモルモン教会に通い始めます。しかし、初っ端からこちらの人も情の薄さに戸惑うことになります。

モルモンにいた人ならば誰もが分かる話と思いますが、モルモンにおいては人間関係をうまく立ち回ることが全てです。でなければ、様々な憂いがまとわりついてくるようになります。

例えば、何故か全員に行き渡るはずの連絡が、僕の方にだけ回ってこないこともしばしばでした。まあ、手違いということも当然ありますし、それ自体は仕方ないのですが、問題はそういった事柄の改善を求めてもされないことです。

むしろ、そういったことを指摘すると、何かにつけて不満を持つ奴、霊的でない奴、などと評価され、だんだん疎外感を味わうようになっていきます。

そんな気持ちを封じ込めてモルモンに通っていましたが、思えばこの頃の楽しい思い出はほとんどありません。記憶自体ははっきりありますが、この頃については「無理やり満足しようとしていた」という記憶しかなく、むしろモルモンの外、職場などの方が良い思い出があります。

また、年を重ねるにつれて、その問題点の本質が見えてくるようになってきました。問題点に気づいた原因は、自分が読書好きで新約聖書もよく読んでいたことがあると思います。彼らの振る舞いが、まさにファリサイ人のようであったことに気づいていたのでしょう。

しかし、恐ろしいことに、それでも僕はモルモン教会が唯一真実の神の教会であると信じていました。そして、それこそが僕を最後まで苦しめた教義でした。様々な問題は、教会ではなく人にある、そういう考えから逸脱できなかったのです。

その心境は「そういう問題点に目をつぶれない自分が悪いのだ。」というかなり卑屈な考えを抱えたままでした。そして、死後の世界の行き先が分かっているのだから、せめて今の人生を楽しもう、と考えました。こうして、僕はモルモンの礼拝に集うことを止めました。

<活発時代の不快な出来事>

その後の反モルモンの方々との出会いの話の前に、活発会員の頃のような不快な出来事について記しておきたいと思います。

モルモンにおけるトラブルの多くは人間関係においてもたらされます。そして、僕のモルモン時代を振り返って、一つのパターンがあることに気がきました。

それは、面倒なことを押し付けられ続けてきた、ということです。ある時、サマーカンファレンスの実行委員を依頼されました。なり手がなかなかいなかったため、困り果てていた独身成人代表の姿を見て、気の毒に思っ引き受けたのですが、その後彼は全く関与しようともせず、協力を依頼しても冷たく断られ、最終的に彼は当たり前のように参加しませんでした。

最後に彼が僕に言った「そんなうまくいかないよ」という言葉は、まるで僕が失敗することを望んでいるかのようでした。

ある時、その人はハンディカメラを購入したとのことで、みんなで何か映画でも作るうとなりました。当時、親しくしていた友人の中に脚本家を目指す人がいたため、その人にも声を掛けてスタートしたのですが、カメラの持ち主は途中で飽きてしまい関与しなくなりました。また、フェードアウトです。

その理由を明確に説明しないため、僕や脚本担当の人は抗議しましたが、何の返事もないまま、結局非はこちらにある、という暗黙の認識が周りに伝わり（脚本家の暴走、と言っていました）居場所をなくしていきました。

これらは、今でも納得のいかない不快な出来事ですが、この後、真面目に教義を受け入れて実践しようという人に待つ地獄はかつてモルモンを経験した人々なら分かると思います。むしろ、こちらが本番でしょう。

「彼らを赦さなければ、赦さない人にはさらに重い罪が・・・。」という無茶な道徳律です。僕は何が正しいのか、何が悪いのか分からなくなり、また彼を赦さないことで罪の意識は重くなっていきました。僕は、モルモンの問題点はこういうところに集約されていると思っています。

揉め事自体はキリスト教会でもどこでもあることでしょう。しかし、これらを解消しようという動きをモルモンは「高慢」やら「不従順」という言葉で拒否し、当事者を責め立てます。まともな理屈など通じない世界、それがモルモンの目指す世界です。活発会員の方々は、我々を納得させる形でこれを否定できるのでしょうか？

<反モルモンとの出会い>

モルモンの中でも、心ある人は何人かいます。僕はそういう人とは今でも付き合いがありますが、そうしなから礼拝に集うことはなくなりました。罪の意識を刺激するものから逃れたかったからです。そんな中、僕はある目的からネットカフェに入りました。その時、ふっと思い出したことがありました。「反モルモンのサイトが猛威を振るっている」と副監督から聞いたことがあったのです。僕は、後戻り出来なくなることを覚悟しつつ、聖徒の未知を閲覧しました。その後、他のサイトも巡っていきました。

「見ると御霊を損なう」そう言われていたそのサイトは、僕に「御霊が幻想であった」ということを教えてくれました。

掲示板の過去ログなども隅々まで閲覧しました。「確かにもう戻れないなあ」と確信した僕は、たまに連絡などをしてきていた宣教師と会うことにしました。

もう一度自分の目で真実を確かめるためです。また、彼らを啓蒙してみたいという気持ちもありました。プチ反モルモン活動というところでしょうか。

そこでは、まさにアナホリで言われてきた光景を目の当たりにしました。「教会にきてない地獄に墮ちるんですよ！」と言い放つ宣教師、「不従順はのろいだ！」と言い放つ隣のワードの友人、伝道主任という肩書きを用いて呼び出し、マルチ系ビジネスを持ちかけてきた者もいました。その人に断りを入れた時の「まあ、あなたには理解できない話だったね。」と言った時の表情など、マインドコントロールを否定する方々には是非見ていただきたいものでした。

恐らく、反モルモンのサイトを見てなければ真剣に悩んでいたところでしょうが、彼らの正体を見極めるという目的の僕にはむしろ好都合でした。彼らの啓蒙は無理と悟った僕は、モルモンでも特に仲良くし、教義に疑問を持っていた友人一人にだけ全て話しました。彼もモルモンを離れ、現在はカトリックの信者となっています。今では、僕を最も理解する友人として、たまに、僕の書き込みを批評していただいています。

僕も現在は正統派のプロテスタントに集っています。しかし、モルモンのことが頭を離れたことはありません。懐かしい気持ちもありますが、それ以上に一人でも多く、無用な罪の意識から解放されることを望んでいます。そして、自分が基督者となって生きていこうと決意した動機でもあります。

モルモン教会において役職名の変更が行われたことはもう既にご存知の方も多いと思います。今まで「監督」と呼ばれた役職が「ビショップ」に、「副監督」が「顧問」になり、「監督会」は「ビショップリック」と呼ばれることになりました。モルモン教会側の説明によればこれまでの監督という日本語の役職名は管理をする人というイメージが強すぎ、本来の教え導くという意味にそぐわないということらしいですが、かと言って他に良い日本語が無いので英語の BISHOP をそのままカタカナ表記で使おうということになったそうです。何ともテキトーで行き当たりばったりの感じがする名称変更です。監督が教え導く責任を十分に果たせていないのなら人材育成に力を入れれば良いだけの話なのに、そうした肝心な点は放ったらかして役職名を変えただけでどうにかなるものでもないでしょう。もっともモルモン教会の監督は、一般キリスト教会の聖職者のように自分への天命であるとの自覚のもと一生を捧げる決意をし、適切な養成訓練を受けて任命されるわけではありません。現状は持ちまわり制で口分読みもしない手引きを渡され、上から言われた用事をこなしていくだけの分担作業に『神の召し』などと大それた名前をつけているだけです。ファーストフード店のアルバイト教育のほうがずっとしっかりしているのではないのでしょうか。こんな実態なのに役職名を変えたところで何も良くなるはずはないでしょう。

さてリアホナでも今月号からこの新しい役職名を使うようになっていきます。その関係なのででしょうか配布が少し遅れたようです。今月号は「新会員向け特別号」となっており、記事の内容が大管長メッセージから始まってほとんど全ての記事がモルモン教会の新会員向けの内容となっております。これが世界的な特集記事なのか日本独自の企画なのかは不明ですが、近年のモルモン教会の会員増加は日本ではほとんどゼロであり、不活発になっていく人数を考えると日本では減少しているのではないかと思えます。伝道にでる若者の数も減少しているようで、モルモン教会側がテコ入れをしたいという思惑は充分感じることができそうです。

今回はこの10月号全般を通して気がついたことを述べてみたいと思います。まずは「大管長会メッセージ」です。ヒンクレー大管長は第2ニーファイ31章を示した後このように述べています。

教会に加わるのは重大なことです。改宗者は皆、キリストの名を受け、それに伴って、戒めを守るという約束をします。しかし、教会に来ることは、一つの冒険です。皆さんを迎える温かく力強い会員の助けと、愛と関心に満ちた支えがなければ、自分が踏み込んだ道に不安を感じ始めることでしょう。喜んで迎え、行くべき道に沿って導こうとする親しみのこもった手と歓迎の心がなければ、道をそれて行くかもしれないのです。わたしたちには、この業が真実であるという証を皆さんが強められるようにする責任があります。皆さんが教会に入り、やがて去って行くままにしておくわけにはいきません。

モルモン教会の大管長が自らの教会組織をいかなるものであると捕らえているかが、この短い文章からわかります。モルモン教会に入ることは「一つの冒険」であり、何もしなければ新会員は去っていく、そんなところらしいです。少なくともまともなキリスト教会でそんなことを言い出す聖職者はあり得ないでしょう。ヒンクレー大管長の言葉には、見かけ上の会員数を追いかけているモルモン教会ならではの体質が垣間見られます。

続いて、ジェフリー・R・ホランド長老の「新会員すべてに知ってほしいこと」という話を見てください。ホランド長老はパウロの言葉を引用しながらモルモン教独特の人生観を次のように語っています。

わたしたちは成功する必要があることを忘れてはなりません。この世の旅を漫然と終えるのではなく、「自分の行程を〔喜びをもって〕走り終える」のです。日の栄えを受け継ぐという報いを得るには、最後まで忠実であり続けることがどうしても必要です。教会では月の栄えや星の栄えの王国を受け継ぐために必要な事柄を教えているわけではありません。わたしたちのあらゆる行いは、日の栄えの王国に至ることを目指しているのです。

これで分かるようにモルモン教における「救い」というのは最期まで耐え忍んだことにより、そのご褒美としていただくものです。一般のキリスト教では「イエス様によって救われたからクリスチャンとなった」という話を良く聞きますが、モルモン教における救いとは人生という壮大な我慢大会の勝者にのみ与えられる景品なのです。その景品に近づくためにはモルモン教会が教えるいろいろなことを行わなくてははいけません。奉仕もその一つです。ホランド長老はこう述べています。

奉仕することはわたしたちにとって義務ですが、それ以上の意味があります。それは、キリストのような行いを示す機会なのです。主はわたしたちの重荷を負ってくださいました。わたしたちも互いの重荷を負うことによって、まことにキリストのような人物になるのです。

奉仕そのものは立派な行いだと言えます。しかし、ホランド長老が言うように「義務」であるから奉仕をするのであれば、それはもう奉仕ではあ

呼べないと思います。奉仕は自発的に見返りを求めないからこそ、気高く貴いのではないのでしょうか？

次に、ウォルター・F・ゴンザレス長老は「宗教は違って家族を愛する」というテーマで自身の改宗体験を述べています。

わたしが教会に改宗した直後は、我が家の空気は張り詰め、誤解もありましたが、わたしも家族も、互いに寛大に接し、尊重し合うようになりました。例えば、末日聖徒になった途端に、わたしの日曜日の過ごし方は一変しました。サッカーをする代わりに教会に行きました。日曜日の過ごし方が変わった理由を知ると、家族は理解を示し尊重してくれました。わたしの方も、家族の伝統を尊重しました。例えば、わたしの家族は皆で集まって祈ってはいませんが、そのことで両親を批判したりしませんでした。

この内容からおそらくゴンザレス長老は、青少年の時期に家族の中で一人だけ改宗したのではないかと思います。そういう状況では家族の理解がないと苦勞することは、私も経験上知っています。きっと彼の家族は理解があり、モルモン独特のくだらない安息日のルールをゴンザレス少年が守れるように協力してくれたのではないのでしょうか。しかしその家族に対する彼の思いはどうでしょう？ 彼は、自分の家族が皆で集まって祈っていなかったが、そのこと批判しなかったらしいです。何かおかしくないのでしょうか？ こんなことをわざわざ「家族を愛する」というテーマの記事でとりあげなければならないことなのでしょうが？ これはモルモン教会の家庭では「宗教が違えば家族と言えども愛せない」という実態があることを物語っていませんか？ ゴンザレス長老は記事の中で、次のように釘をさすようなことも言っています。

福音の教えと家族の信仰が相反する場合は、自分の信仰を曲げてまで妥協する必要はありませんが、

このような一文もモルモンの実態を如実に示しているようです。さて最後にラリー・ヒラーという人が「困難を乗り越える」という励ましのような記事を載せています。そこにはこうあります。

無知は恥ずかしいことでも、罪でもありません。覚えなければならない新しい言葉や用語があることに、困惑することがあるかもしれません。（什分の一の年末面接？）教会の組織はすべて特有のものです。（ステーキ高等評議会？）聖文を読んだり、示された箇所を探したりすることは、初めは難しいかもしれません。（オムナイ書はどこですか？）

要するに、教会に来ると初めて耳にする言葉がたくさんありますが、少しづつ憶えていけばいいですよ、と言いたいのです。しかし面白いことにこれらは初めて教会に来たゲストに対する言葉でなく、仮にもバプテスマを通して主と誓約を交わしたことになっていくはずの「会員」に向けての言葉なのです。

モルモンの新会員とは、自分の教会の献金についても、役職名も、聖典の内容もロクに知らない人たちだということです。逆に言えばモルモン教会は何も知らない人たちに、教会に関する十分な情報を提供せず、教えたり説明もせずバプテスマを施しているということなのです。

これは詐欺と同じではないでしょうか？ 商取引の世界では重要な部分に関する十分な説明無しに行われた契約は無効となります。そのような人間社会の基準にすら達しない伝道を、唯一まことの神の教会を標榜するモルモン教会が行っていることがはっきりとわかります。

教会に関することを全てきちんと説明してから求道者がバプテスマを受けたという気持ちになるまで待つという至極当然な方法が、何故出来ないのでしょうか？ それはモルモン教会が自らの教義や歴史に自身を持っておらず、虚構の宗教であることを自覚しているからではないのでしょうか？ 既成事実さえ作ってしまえば後はなんとかなると考えているように思えて仕方ありません。いずれにせよこのようなデタラメを行っていけばいずれツケを払わなければならない時が来ます。日本におけるモルモン教会の停滞はそういう事なのだろうと思えるのです。

連載 北龍専用 カルトと恐怖

今回は「カルトと恐怖」と言うテーマで書いてみたいと思う。私自身の体験から考察する。URLは明かさないが、「悪徳反モルモンランキング」と言うサイトがある。モルモン教に対して批判的な意見を持つ者をハンドルネーム（時に実名も）をあげて、投票と称しながら、中傷を書き連ねようというまことに悪辣なものである。

当然のごとく私もこのランキングの上位に名を連ねることになった。というよりも目的のひとつに私への個人攻撃があったのだからあたりまえのことではあるが、

しかし、さすがの私も執拗な誹謗中傷にあって、いわば「モルモン恐怖症（造語）」を発症してしまった。モルモン教徒が怖い、モルモン教徒に殺されると言う強迫観念の虜になってしまったのである。オウム真理教ではあるまいに

ないのだが、私の精神状態はまさしく、パニック状態だった。

私がカウンセリングを受けているパスカル氏に相談したところ、「血の贖罪」「神殿の儀式」が私の精神の中にフラッシュバックされてきてパニックを起こすのだと言う。

モルモン教初期には「血の贖罪」と言う教義があった。「血の贖罪」については高橋弘教授の論文に詳しいのでそちらを参照していただきたい。下記のサイトに掲載されている。

<http://garyo.or.tv/boryoku.htm>

そして、現在は廃止されているがモルモンの神殿のエンダウメントの儀式の中で神殿の儀式の内容を他人に漏らしたら首を切られて殺されても良いと言う動作もあった。

<http://seitonomichi.maxs.jp/sinjitu/temple/temple.htm>

私は現在もこの恐怖と闘っている。

ところで、こうしたカルトの恐怖の植え付けはモルモンに限ったことではない。ある日曜日、私が現在通っているプロテスタント教会に一人の若い女性が礼拝を訪問してきた。彼女は所謂エホバの証人の2世で4歳の頃から両親に連れられて、エホバの証人の活動をしていたらしい。20歳になった頃、自主的に脱会したらしいが、今でも幻聴などの精神的症状に悩まされていると言う。エホバの証人をやめたら・・・と言う恐怖が彼女を苛むのだろう。彼女は両親が憎い、殺してやりたいとさえ言っていた。

ここにも、私との共通性を見出す。私も時折、自分自身の感情をコントロールできなくなって自傷衝動や誰かを殴りたいと言う衝動に駆られる事があるのである。冗談ではなく、いつ自分が新聞の三面記事を飾ってもおかしくないと言うの考えすぎだろうか？

カルトの教義には例外なく、裏切り者への報復とでも言うべき教義が存在する。モルモン教徒も知らず知らずのうちに、精神に恐怖を植えつけられているのだ。

訃報 ジェラルド・タナー氏

モルモン研究者、反モルモンとしてあまりにも有名なジェラルド・タナー氏の訃報が届いた。本年10月1日のことである。享年68歳。死因はアルツハイマーに関連する病状とのことである。

氏は著名なモルモン教徒ジョン・タナーの子孫で、多くのモルモンの家庭の子と同様にモルモン教への信仰を持つよう育てられた。そんな彼に転機が訪れたのは18歳のときであった。

それはデビッド・ホイットマーの著書「An Address to All Believers in Christ」との出会いであった。彼がそれを最初に手にした時の行動は投げ捨てると言うものだった。モルモン教とにとってそれは確かに「読んではならない書物」である。しかし、青年の知的好奇心は教会の教えに勝った。彼は内容を確かめてからでも遅くないと思い直し、その本を改めて手にした。青年には、モルモン教の教えは正しいから、必ずホイットマーの間違いを発見し、より強い証しを得れるとの自信があったのだ。しかし、読み始めてすぐ、彼に待っていたのは全く違った結果であった。ジョセフ・スミスの示現とは、後から変更が加えられたものであって、示現が嘘だと思わざると得なかったからだ。

その時がタナー氏のモルモン研究者としての第一歩であった。ミズーリーのインデペンデンスを訪問し、ホイットマーの著作のオリジナルに接し、資料に間違いの事を確認する。この原資料を探求し、考証するというスタンスは生涯通じてかわらなかった。

氏はこの後、モルモン教が間違いであると言う証拠を立て続けに発見し、発表して行くことになる。1954年に、プリガム・ヤングの子孫であるサンドラ・マギーと結婚。1983年には非営利組織「Utah Lighthouse Ministry」を設立する。モルモン教のとは不倶戴天の敵タナー夫妻の誕生である。

個人として、また夫妻として記された数ある著作中の白眉はやはり

「Mormonism - Shadow or Reality?」である。1987年の初版以来、同書は版を重ね現在は5版である。数あるモルモン教研究の著作のなかでも、同書は最高峰のひとつであることは論をまたない。インターネットの普及で注文もきわめて容易になった。また、現在はCD-ROM版もリリースされている。1987年を思うとまさに隔世の感であるが、同書は今なお輝きを増している。

モルモン教は御用学者たちを駆使し、氏らの著作を批判し、モルモン教を擁護しようとした。しかし、それらはことごとく徒勞に終わった。その理由は簡単である。氏の研究方法が徹底したし資料主義であり、資料と言う絶対的事実に立脚していたからである。

氏の著作を読むと、モルモン教は検事の前の刑事被告人のように、次々と提示される証拠、証言によって、逃げ場なく追い詰められている。

思えば、このスタンスは彼がホイットマーの著作に接したとき、18歳のときから変わらないのである。青年の好奇心と探究心、そして彼には理性によって判断することができた。論理的思考による結論に従う勇気があったのである。

このことは時を越えて私たちに重要である。いまや、モルモン教の真実を伝える情報はタナー氏の時代の比較にならないほどの量である。しかし、理性による判断ができなければ、どうであろうか。タナー氏の青春はこれを問うている。

最後に彼の述懐を紹介する。

「モルモン教会は良い品行を私に教えました、彼らは私の人生を変えるこ

に関してはほんのわずかしが話さないで、ジョセフ・スミスに関する話が多かったのです。その結果、私は、自分自身の中に罪を克服する力があると思い始めていました。罪に打ち勝つためには神の助けこそが必要であるということを知らなかったのです」

タナー氏にとってモルモンが間違いだという発見より重要なものは「罪人である自分」の発見、真のキリストとの出会いであった。

おしらせ

高橋弘先生の連載はお休みします。

先生は新著の執筆で多忙な毎日をお過ごしのことです。

会の運営上のあれこれから会報の発行が遅くなりました。ここからお詫び申し上げます。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はプレーンテキストで作成ください。

メールマガジンバックナンバーはこちら

<http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/kaihobn.htm>

- ・ 発行者 勇気と真実の会
- ・ ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>